



Title	未来共生トロント大学多文化研修2015年：現地報告
Author(s)	フェイニグ, ニコラス; ダールハス, ラシャ; ギブソン, ジェニファー 他
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 135-150
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56261
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

トロント大学から見た大阪大学

未来共生トロント大学多文化研修 2015 年：現地報告*

ニコラス フェイニグ (Nicholas Feinig)

ラシャ ダールハス (Rasha Darghawth)

ジェニファー ギブソン (Jennifer Gibson)

フェリシア ペッリチェッリ (Felicia Perricelli)

ケイトリン テリエン (Caitlyn Therrien)

トロント大学大学院人類学科博士課程在籍

目次

はじめに

1. 「共生」とは

2. リージェント・パークとファースト・ネーションズ・ハウス——多文化主義とカナダ植民地史

3. ガーナ・ペンテコステ教会——国境を超えたディアスポラと宗教

4. ケンジントン・マーケット——インナーシティーの社会基盤の政治

おわりに

はじめに

2015年4月30日から5月8日まで、トロント大学は大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム（以下、未来共生プログラム）の学生たちを迎えた。大阪大学の大学院生は、トロント大学の大学院生と協力し、日本の状況における多文化共生の研究に必要な比較枠組を作り出すために、大学での特別セミナーおよびトロント各地での学外活動に参加した。このプログラムは、中心となる3つのクラスターから構成されている。各クラスターでは、その文化的多様性によって知られているトロントの街が直面している様々な問題に関心を向けた。第1のクラスターは、人類学部のボニー・マッケルヒニー教授 (Bonnie McElhinny) が担当し、反人種主義や反植民地主義の視点を取り入れたカナダの多文化主義の批評について概

* 本稿は原文英語原稿を日本語に翻訳したものである。

説した。第2のクラスターでは、人類学部のギリッシュ・ダスワニ教授 (Girish Daswani) が担当し、ディアスポラなつながりの中での国境を超えた「居場所づくり (home making)」と宗教の役割に注目した。最後のクラスターは、アジア・インスティテュートでディレクターを務めるジョシュア・バーカー (Joshua Barker) が担当し、世界中から集まった様々な物とサービスが提供されるケンジントン・マーケット (Kensington Market) についての事例研究を中心に行われた。学生たちはこのマーケットで民族学的フィールドワークを行い、政治的論争の場としての都市部の社会基盤を分析した。

カナダは独自の文化的環境を背景にして国のブランドを築いてきたが、活力ある多文化主義や多様性が存在することを前提にした論議は、カナダのコミュニティーで日々発生する政治的な論争や抵抗を往々にして隠蔽している。さらに、「多文化主義」は、その存在を疑問視されない状況においては、逆説的に社会を一枚岩のように見せてしまう。しかしながら、北米先住民族による領土主権の主張に対する自覚の広がり、市民権の規制強化のための法改正、2014年の連邦議会議事堂襲撃事件¹を始めとして、カナダの政治的状況について近年見られる変化は、カナダにおける多様性プロジェクトに対するカナダ国民や外国のオブザーバーの見方を揺るがし始めている。未来共生プログラムは、これらの問題のいくつかについて、学生間の意見交換を促し、学生たちに考える機会を提供した。大阪大学の学生たちは、日本独自の政治的・経済的状況を踏まえうえて、「多様性」に対する非常に様々な理解のあり方を教えてくれた。国籍、「民族集団」、宗教、性的指向や能力の差異を越えて「多様化の複数性」を認めて関わり合うこと、つまり、それぞれの概念の境界線を継続的に書き換えることの重要性が確認された。「多文化主義」を、単一の枠組みを越えてどう考えるべきか。また、多岐にわたる多様性についての表現や理解の仕方、あるいは多様性が政策に組み込まれる方法は、どう認識すべきか。カナダの状況から学んだどのようなことが日本の状況に当てはめられるか、またその逆はどうか、といった問題が議論された。

このフィールドワーク報告は、未来共生プログラムのカリキュラムの具体的な構成に対するトロント大学RA (Research Assistant) チームによる考察を含んでいる。RAチームは、プログラムの調整を支援し、さまざまなイベントやフィールド・トリップの多くを計画し、実行した。私たちは講義や学外活動に参加し、学習の経験を共有し、大阪から来た仲間たちとの関わりを持った。これは、私たちが往々

にして当然のこととして理解してしまっているカナダの多文化主義について、未来共生プログラムの精神に基づいて批判的に考察する貴重な機会であった。RAチームは独自の立ち位置から、現地訪問の内容ならびに大阪大学の学生たちの反応やコメントを考察した。日本の学生との交流と、彼らからもたらされた洞察は、自由で民主主義的な状況における共存の原則として当然のものと思われていた多様性の「普遍性」をゆるがし、このテーマを改めて検討していくための道を開いた。

本報告では、最初に、学生、未来共生プログラム引率教員、講師、およびRAチー

4月30日	木	9:00-10:30	総合説明	トランジット・ハウス Transit House
クラスターⅠ：カナダの多文化主義に関する歴史と論争の概要				
		10:40-12:10	Session 1: カナダにおける歴史的な背景、多文化主義、白人定住者の植民地主義	トランジット・ハウス
		13:30-15:30	キャンパスツアー 図書館のオリエンテーション	AP367
5月1日	金	9:00-10:30	Session 2: 反人種差別主義者および反植民地主義者の多文化主義批判；和解の試み：賠償、謝罪、脱植民地化の考えの間にある差異	トランジット・ハウス
		10:50-12:20	Session 3: 事例研究	トランジット・ハウス
		14:00-15:30	Fieldtrip I: リージェント・パーク (Regent Park) ウォーキング・ツアー：再開発と社会的多様性	
5月2日	土	10:00-13:00	Fieldtrip I: カナダ先住民センター (Native Canadian Centre) とファースト・ストーリーズ・バスツアー (First Stories Bus Tour)	
クラスターⅡ：トランスナショナリズムと宗教の人類学：ディアスポラな居場所づくり				
5月3日	日	9:30-18:00	Fieldtrip II: トロントの優先地区における多文化主義と宗教	
5月4日	月	9:00-10:30	Session 4: 「居場所づくり：国境を超えた移住と宗教」	トランジット・ハウス
		10:40-12:10	Session 5: 事例研究	トランジット・ハウス
		13:30-15:00	Session 6: ディスカッション	トランジット・ハウス

クラスターⅢ：ケンジントン・マーケットの民族学と社会基盤				
5月5日	火	9:00-10:30	Session 7: ケンジントン・マーケットの民族学	トランザット・ハウス
		11:00-15:00	Fieldtrip III: ケンジントン・マーケットでのフィールドワーク	
		15:30-17:00	Session 8: ケンジントン・マーケットでのフィールドワークについてのディスカッション	トランザット・ハウス
5月6日	水	9:00-10:30	Session 9: 都市部の社会基盤、アクティビズム、文化的生産	トランザット・ハウス
		10:30-終了	Fieldtrip III: ケンジントン・マーケットツアー	
ワークショップ				
5月7日	木	10:00-16:00	ワークショップの準備 ①	AP367
		16:30-21:00	ワークショップの準備 ②	AP330
5月8日	金	10:00-15:00	大学院生共同ワークショップ	ラーキン会館 Larkin Building
		15:30-17:30	学生の共同活動：先住民フィルム上映会	ロバーツ図書館 メディアセンター Roberts Library Media Commons

図1. 未来共生トロント大学多文化研修2015年の日程

ムの間でなされた議論と意見交換の内容に基づいて、「共生」と「多文化主義・多様性」という2つの対照的な概念を検討する。この分析から明らかになるギャップやずれを、フィールドからの考察を通して検討することで、よりの確かな調査の道が開かれるはずである。まず、われわれはリージェント・パーク (Regent Park) 開発プロジェクトとファースト・ネーションズ・ハウス (First Nation's House) で、多文化主義と多様性の話題にどのように学生たちが関わり議論したかを記述し、検討する。その後、ガーナ・ペンテコステ教会 (Ghanaian Pentecostal Church) を訪問し、そこでの大阪大学の学生たちの洞察に刺激されることで展開した、政策としての多様性についてのリフレクシブな批評を展開する。最後に、ケンジントン・マーケッ

トを舞台としたフィールドワークのメタ分析を行う。ここではケンジントン・マーケットで起きている政治的紛争において、「共生」の持つユニークな性質がどう反映され、あるいはどう反映されていないのかに特に注目する。

1. 「共生」とは

このプロジェクトのコースワークを通して、RAチームはカナダの「多様性」と日本の「共生」の間にある関係について、いっそう興味を持つようになった。私たちは「多文化主義」あるいは「多文化共生」ではなく、「多様性」と「共生」に焦点を合わせていった。「多文化主義」は、異なる文化グループの存在を前提としているため、人種の分類システムが強調されるという問題をはらんでいる。「文化」に焦点を合わせてしまうと、ジェンダー、社会・経済的階級、能力の問題といった議論の広がりをおこの意味で狭めてしまうことになる。これらのすべては「多様性」という用語で表現することができる。一方の「共生」という日本語の言葉は、意味としては「共」(together)と「生」(live)の組み合わせであるから、意味の一部を表現しているにすぎない。大阪大学の学生たちとフィールドでディスカッションをした際、「共生」という言葉の意味はもともと生物学に由来するものであり、様々な種の生命体の間にある関係を表現する言葉であるということを知った。つまり、英語の「symbiotic」という言葉の方が近いことになる。人間とそれ以外の存在との間、人間とその環境の間にある関係というこの考えは、「共生」の持つユニークな特徴を表している。共生の概念は、社会的な関係について様々な理解がありうることを浮かび上がらせ、より広い環境におけるそれぞれ独自の場を強調する。興味深いことに、「多様性」という言葉もまた、生物学において重要な意味を持っている。強く健全な生態系は、資源のバランスの変化を埋め合わせることができる。より回復力のあるシステムの中で、多くの種が生産的に共存している結果である。それは生物学的な多様性の結果であり、この多様性によって実現していることが多いのだ。

未来共生プログラムの構成は、場を重視している。多様性について学ぶために、学生たちは、教会、マーケット、コミュニティー・センターを訪れた。生活と仕事の舞台となる土地と建物、販売する物品や分かち合う食べ物、栽培する植物、保護する公園との関係の中で、どこでどのように、これらのコミュニティー

の人々が生活し、コミュニティーの組織作りがなされているかを理解するためである。大阪大学の学生たちとの討論を通して明らかになったことは、カナダの状況において、「多様性」が積極的に政治利用されていることが、外からの視点にとってはユニークらしいということである。「共生」という言葉は、調和 (harmony) や共生 (symbiosis)、共存している状態 (coexistence) を示すことが多いが、「多様性」は積極的な政治的ツールとして使用されることが多い。事例研究を通して、学生たちは、多様性が人々や組織に対して変化を起こしたり要求したりするための手段として様々な人々の行動の中で用いられるさまを学んだ。カナダ政府の方針の中心に多様性と多文化主義が掲げられていることにより、この種の要求が可能になっているのである。

以上の洞察からは、次の2つの重要な問題が導き出された。本報告の次節以降では、これらについて考察していきたい。

- (1) トロント大学RAと大阪大学の学生の交流を通して、多様性を、空間、場、物を含め、人を超えるプロジェクトとして理解することがどのようにして可能になったか。
- (2) 多様性について考え、多様性に直面する中で生じる衝突が果たしている役割とは何か。

RAチームの集団としての経験を活用しながら、これらの考察をゆるやかな構造を保ちつつ行った。私たちは、大阪大学の学生、講師、RAチームとの間に生じた具体的な出会いや対話に焦点を合わせる。対話において、困惑し当惑する瞬間が何度もあった。理解におけるこのようなギャップは、カナダの多文化主義と多様性の性質に関してRAチームが持っている仮定に気づかせるものであり、批判的な分析のための場を開くものであった。

2. リージェント・パークとファースト・ネーションズ・ハウス——多文化主義とカナダ植民地史

モジュール1では、カナダが現在も植民地の歴史と闘っていることを学生たちに紹介した。カナダ政府による多様性と多文化主義の促進は、先住民たちへの不



写真1. リージェント・パークへのフィールド・トリップ (2015年5月1日)

当な扱いとの明白なコントラストを示している。寄宿学校の歴史と一方的な合意の後遺症が、現代における先住民による賠償請求に大きく影響している。このテーマについての議論は、政策としてのカナダの多文化主義についてより広範な批評を取り込みながら展開した。ボニー・マッケルヒニー教授のセミナーと並

行して、学生たちはリージェント・パーク開発プロジェクトの現場を訪れた。市の一部であるこの地区では、多様な経済的バックグラウンドを持った家族を呼び寄せることを目的に、古い家々が立ち並ぶ住宅地を、住宅地、商業地、コミュニティー・センター、公園などが混合した空間へと転換しているところである。この地域で研究し、学位論文を完成させたばかりのシャロン・ケリーが、ツアーのガイドとして現状を教えてくれた。議論は大いに刺激された。リージェント・パークでは、多様な経済的グループのメンバーを混合しつつ、住民の人数を大幅に増やす多角的な開発プロジェクトを実行している。私たちは、このプロジェクトの目標が、日常的な「多文化」の風景の上に築かれているということ学んだ。仮に、あるプロジェクトが民族、人種、文化の異なる多様な人々を完全に包摂できたとしても、住民の経済的地位の相違の「解消」が、唯一の課題として残ることになるだろう。リージェント・パークのプロジェクトがもつ注目すべき特徴とは、階級が存在および、様々な階級の混合の促進にある。このシナリオにおける多様性は、どのカテゴリーに属する住民にとっても益となるコミュニティーを形成しつつ、明らかに異なる階級の人たちを、社会的、空間的に混合することを推し進めようとして実行された。

このプロジェクトを訪問し、またシャロンとの議論の中で言及された問題および批評は以下である。

- (1) トロントの多文化主義は、市民の間で非常に広く普及している概念で

あり、当然「功を奏している」ものと受け止められている。しかしそれは思い込みなのであって、人々の関心はこの概念の本来の意図とは異なる方向を向いているかもしれない。そうだとすると、その経緯はどのようなものか。

- (2) 多文化主義を実現する過程で、多様性が階級の問題に集中しているものとして取り上げられているならば、宗教や文化のニーズにはどのような対応がされているのか、あるいはそれらは見過ごされているのか。この質問は、開発が様々な段階で実行されているとは言え、かつて利用可能であった宗教やコミュニティのための多用途な空間がもはや存在しないということを、私たちに気づかせてくれた。
- (3) リージェント・パークに移り住む唯一の必要条件は、引越資金を持っていることであり、コンドミニアム購入者の、文化、民族、人種、言語、宗教による内訳は不明である。多様な側面をもつ人々を一緒にしようというこのコミュニティ開発プロジェクトは、経済状況以外の側面をどのように把握しているのか。

未来共生プログラムの学生たちは、日本の公営住宅に見られる、住民が非常に密集して生活している状況と比較しようとした。ここでは、トロントの事例のような問題は見られないということである。それは、日本の住民が都市の公営住宅での暮らしにおいて直面している緊張が、世間の議論となって現れていないからなのか。こういった話し合いが必要とはされないのか、それとも怠慢によって口をつぐんでいるのか。時が経過すれば、リージェント・パークの状況もこれと同様になっていくのか。カナダにおける多文化主義の文脈では、社会的な一体性および調和した暮らしという理想的な言葉が、現在と将来に加えられるはずの批判の影を薄くしているか、批評を抑えているかもしれない。

モジュールの焦点は、新たなフィールドの訪問と共に次へと移った。ファースト・ネーションズ・ハウスとファースト・ストーリーズ・バスツアー（First Stories Bus Tour）である。このツアーはファースト・ネーションズ・ハウスのスタッフであるブライアン・ガイドで始まった。ブライアンは、トロントの風景が「この場に在る先住民のささやき」²で満ちていると言う。このツアーの目的は、これらのさ

さやきを私たちが引き出し、聞こえるようにすることだった。ツアーでは、学生たちを町のいくつかの場所に案内した。そこで彼らは、かつて使用され所有されていた場所やその残骸を見た。ハイ・パーク（High Park：トロントの西端にある大きな市立公園）で、ツアー一行はアニシナアベ族のメッセージ・ツリーを見た。この木には、方向を示す目的で何百年も前に曲げられ、北を指し続けている枝がある。ダベンポート・ロード（Davenport Road）は、「契約」³前に盛んに利用されていた小道であり貿易ルートであった。初期の植民地開拓者はこの小道を利用したが、最終的には、この小道の上に今日私たちが知る道路を建設した。現在ここを訪れる人々も、ここに暮らす住民も、これらが一本の枝や道路という以上の歴史的にユニークな意味を持っているということを、教えられる機会がなければ知ることはできない。しかし、いったん対象物や環境をこのようにとらえることを教えられたなら、街の風景との出会いの意味はすべて根本から変わってしまう。このバスツアーの目的は、参加者がそれぞれの場が持つ沈黙させられた歴史を知り、トロントを「特徴づける」ことだった。

このツアーは、ファースト・ネーションズ・ハウスの訪問によって締めくくられた。この施設は、トロント先住民の遺産の保護と促進、先住民コミュニティの支援のために作られた。ここで学生たちは再度、カナダ先住民が直面している課題について、非公式ではあるが集中的な議論を行った。ツアー2人目のガイドは、アニシナアベ族のサムという名前の青年だった。彼は、自分の先住民カードをツアー参加者に回し、このカードについて厳しい非難を口にした。大阪大学の1人が「なぜカードを拒否し、他のカナダ人とまったく同じであることを主張しないのか？」と尋ねた。サムは、先住民としての身分を拒否すると土地に対する権利を放棄することになる、と抜け目のない答えをした。これはこれで問題を孕む行為であるが、社会の隅に追いやられたグループが、多文化主義の複雑な議論を逆手にとり、自分たちの利益を高める手段として利用することのわかりやすい例であった。

学生たちは、カナダ先住民と、日本政府の方針において周辺的な立場にある琉球民族の苦闘を比較した。米軍基地のために沖縄の土地を提供していることは、コミュニティで何十年にもわたって紛争の種となってきた。基地を置くことによる経済的な見返りが、基地周辺住民の健康と福祉を犠牲にしてもたらされた。普天間飛行場を移転しようとする動きが出ているが、活動家たちは問題を解決せず別の場所へ移すにすぎないと訴えている。日本の植民時代の遺産に起因し

(沖縄はかつて琉球と称していたが、1879年に日本に併合された)、米国の植民地支配的介入(第2次大戦後、米国は沖縄を統治下に置き、沖縄と沖縄の人々を犠牲にし、現在も続く日米間の安全保障関係の確立を促進した)にも起因する日本国内にある人種の階層⁴を具体的に表しているのが、沖縄の人々の基地負担だ。興味深いのは、両方の事例に共通している、人間ではない当事者が空間をめぐる政治的議論に関わりをもっている方法だ。カナダ先住民たちは、自分たちの縄張りとの霊的で実際のつながり(神話や慣習の中で表現される)を、土地の管理者としての自らの立場を主張する手段として持ち出すことが多い。一方、有名な「沖縄ジュゴン対ラムズフェルド事件」(環境保護活動家たちは、当時の米国国防長官ドナルド・ラムズフェルドに対し、「ジュゴン」を原告に加えて訴訟を起こした。絶滅危機に瀕している海洋哺乳類ジュゴンは、その生息環境が米軍基地建設によって脅威にさらされていた)では、カナダ先住民の事例と同様に、人間以外の当事者であるジュゴンを、基地の建設によっておびやかされている土地と在来種とコミュニティの代表の立場に置いた。

3. ガーナ・ペンテコステ教会——国境を超えたディアスポラと宗教

ギリッシュ・ダスワーニ教授によって行われたモジュール2では、トロントのディアスポラなコミュニティ、居場所づくり(home making)、「方法論的ナショナリズム」の概念に取り組んだ。ここでは「国家」を、国境を越えて国外へ移住した者との関係を継続し、それを支える存在として考える。セミナーでは、居場所づくりという考えに関連する諸概念を検討した。これには、「近隣」、「場所」、「快適さ」、「所有物」、「親しさ」、「安全」、「治安」等が含まれ、これらはすべて国家の中心概念の外縁を明確に表しうる。これらの概念について、未来共生プログラムの学生たちの意見は大方一致し、それに対してダスワーニ教授は、この問題に対する「お馴染みの反応」であると話された。しかし、多文化主義と多様性という観点から見ると、「home」のアイデンティティやタイプは非常に多様である。いわゆる「文化的集団」があったとしても、その内部が均質であることはまずない。例えば、未来共生プログラムの学生たち自身の場合でも、全員を一般化あるいは均質化することは容易ではなく、それぞれが他とは異なる家族の歴史を持ち、多様な宗教に所属し、様々な国家とのつながりや日本に移動する権利を持っていることが明らかであった。



写真2. ガーナ・ペンテコステ教会への訪問(2015年5月3日)

非営利の宗教団体として連邦政府に登録されているガーナ・ペンテコステ教会で、学生たちは朝の礼拝に参加した。この礼拝では神をたたえ賛美するダンスや歌を観察することができた。ここで学生たちは、宗教的な側面への取り組み方が参加者によって異なることに注目した。ある男性は祈りと朗唱に熱心であったが、

別の人は携帯電話をいじっていた。また、権威に満ちて話することができるかどうかは性別によって区分されていたし、「典型的な」ガーナ人の衣装を身に付けているかどうかにも性別が表れていることが多かった。このガーナ人教会は、一般的には典型的なガーナの文化的特性を持つ人々が集まる場所とみなされるため、このような不均一性に言及することは重要である。このアイデンティティの分類は、ガーナ系トロント市民が、「普通の」市民権および他の社会のメンバーと同じトロント市民としての身分を目指して努力するにつれて、政治的に扱われるようになる。ガーナ人の、トロントを自らの「home」としていく能力は、彼らの政治的・人種的な主観性の不均質さを土台としているのである。

教会メンバーの不均一さを直接感じ取った後、グループでは「文化的多様性」が、本質主義的に定義される文化的集団をどのように創出しているかについて議論した。一般的にこうした文化的集団は、市民としての身分階層のようなものに基づいて組織化され、一部の者たちには他の者よりも大きな特権が与えられる。これらの階層(実際の市民権とは関係なく)がもたらす緊張や不快は、少数派と多数派の住民の間で、日々の付き合いの中にはっきりと表れる。学生たちは一つの一般的な例を検討した。つまり、「あなたの出身地はどこですか」という一見差し障りのない質問である。何の問題もないように思われるこの質問は、状況によっては相手にかなり敵対的に受け取られる可能性がある。少数派グループは、出身を問われて答える際に、自分たちの帰属を正当化すること、あるいは自分たちの容姿の違いを説明することを常に求められているからだ。

こうした議論を通して、RAと大阪大学の学生双方は、カナダおよびトロントは、多様性から生じる問題、あるいは多様性政策を実行するための問題に対して、「答え」や「解決策」を持っていないということを理解した。日本の状況に置き換えたり、日本における問題の解決のために取り入れたりできる実行可能で具体的なプランはほとんどないのである。多様性は容易に法制化できるものではないし、それぞれの社会の多様なメンバーが、予想通りに取り上げたり取り組んだりできる問題でもない。公平、社会的疎外、文化の本質化といった問題として、緊張は絶えず現れ、存在し続けており、これらのすべてにオープンな対話を通して取り組む必要がある。未来共生プログラムのカリキュラムを通して、衝突の原因となる事柄が明らかにされた。しかしこれらは、私たちが創造的かつ生産的に自分たちのコミュニティに関わる助けとして活用できるタイプの衝突なのである。

4. ケンジントン・マーケット——インナーシティーの社会基盤の政治

ケンジントン・マーケットのツアーでは、空間、場、政治を調査した。ケンジントンはトロントの多様性のシンボルになっているが、空間の使用（道路、宅地開発、店先など）をめぐる衝突や紛争を見れば、概念および政策としての「多様性」は、政治的な主張の道具として利用されているとわかる。ケンジントン・マーケットの多様性は、トロントの市行政、コミュニティ組織である「ケンジントン友の会 (Friends of Kensington)」¹⁾、地元企業のオーナー組合といった多くのグループが、ツールとして活用している。活用の目的は、観光客の呼び込み（人やサービスが様々なに融合していることを宣伝する）、大手資本の締め出し（大企業による高級化や侵害からテナントを守る）、一定の物品（地元のもの、工芸品、輸入品）の取引を奨励し、その他（量産品、ブランド品）の取引を防止するといったことである。ケンジントン・マーケットは、常に緊張状態にある。この緊張は、このマーケットが市のユダヤ人地区の中に（地区として）1910年に始まった時にさかのぼることができる。続いてやって来た多様な移民たちが、層をなして定住したことにより、辺り一帯にはユニークな特徴が生まれ、今日私たちが見ているようなマーケットを作り上げてきた。

ケンジントン・マーケットは絶えず変化している。だが、ケンジントン友の会代表であるドミニク・ラッセルと議論をする中で、トロントの人々がケンジントン・

56 Kensington



図2. ケンジントン・マーケット（地図）

出典：Barbara Myrvold. *Historical Walking Tour of Kensington Market & College Street*. Toronto: Toronto Public Library Board. (1993)

マーケットを守る必要性を感じていることが分かった。そこで問題は、それがなぜ、どうしてなのかということになる。つまり、変化を特徴としているはずのものをなぜ保存するのか、また、たえず流動しているものをどうやって「保存」できるのかということだ。担当者は、「ケンジントンには、その人口構成が移り変わっても、ずっと変わることのない性質があるのだ」と語った。それは、「村という感覚」と「多くの穴 (porosity)」²⁾（人が引越して来たり出て行ったりする場）である。彼女の言葉によれば、ケンジントンは「居場所のない人々のための場所」ということだった。現場訪問に先立って行われたセッションでは、ジョシュア・バーカー教授がケンジントンのモラル・エコノミーを取り上げた。ケンジントン・マーケットは経済的なやり取りのみで成り立っているのではなく、その背後にある社会的な意味を大いに活用している。ラッセルの発言は、個人的に価値のあるコミュニティであることが、マーケットのアイデンティティである「ブランド」にとって重要だということを示している。つまり、マーケットで評価されているのは、場の感覚なのだ。このように理解すれば、ケンジントンの多様性について、人間以外の対象をも

含めて考えることができる。この場を特徴づける関係性は、人々、売り買いされる品物、人々が店を出し生活する場の間に存在する。簡単な民族学的インタビューと観察をする間、大阪大学の学生たちはここでの経済活動に加わることによって、ケンジントンを特徴づける関係性の中に入ることができた。例えば、散



写真3. ケンジントン・マーケットのフィールド・トリップ (2015年5月5日)

髪をしてもらったあるグループは、理髪店の椅子に座って親しく理容師と会話をすることで、彼らの生活をより知ることができた。ケンジントン・マーケットには、「ハンガリー・タイ」といった不思議な組み合わせの名前のレストラン（シュニツェルとダンプリングを添えてタイカレーを出す店）や古着屋、またラテン・アメリカ料理の屋台などがあるが、こうしたマーケットで提供される品物やサービスの「多様性」は、独特で多様な活気のあるコミュニティとして正当に評価し、保護してほしいという幅広い要求を支えている。

ラッセルとの議論から、空間がマーケットを特徴づけているということが明らかになった。私たちが調査した意見や利害の対立の多くは（大型食料品店の開店、新しいコンドミニアムの建設、ホームレスの人たちの排除を意図した法律、日曜日の歩行者天国の議論など）、空間の管理を原因とするものであった。「共生」のユニークな特徴は、これらの問題の中に反映されている。つまり、多様性は、環境に関わるいっそう大きな問題として、また人々や物がその中で組織される方法として現れるということである。調和的に共存するには、単に人の問題だけではなく、管理が必要である。社会基盤、品物、サービス、庭や公園、家、芸術などはすべて、戦略的に整えられ、それらの関係は激しい議論や頻繁な変更にとさらされる。このように、「多様性」は場の持つ意味の問題として理解することができる。私たちはある地域をどのように理解するのか、そして理解することにより、私たちがその地域を経験し、交流する方法はどのように変わるのか。大阪大学の学生たちがケンジントン・マーケットの空間性と触れ合った姿は印象的であった。学生た

ちはケンジントンの南と西の端から入って行き、低所得者コミュニティの住宅プロジェクトに関係のある地域を調査した。マーケットの中心部にあるコーヒー専門店や流行のレストランには、地元の人たちや観光客の大半が集まる。その一方、低所得者コミュニティの住宅プロジェクトと関係する地域一帯では、マーケットでも最も弱い立場の住人たちの多くが職場や住居を持っている。地理的な境界線でケンジントンを調べると、マーケットに引っ越してくる人や出て行く人たちが、あるいはマーケットに近いことで暮らしが形成されている人たちが集まるため、地区の間の境はあいまいになる。未来共生プログラムの学生たちは、コミュニティの住民が引き寄せられる拠点あるいは中心としてマーケットを取り扱うのではなく、ケンジントン・マーケットの範囲について調査し、議論をたたかわせた。

おわりに

未来共生プログラムのカリキュラムを通して、「多様性と多文化主義」は意味や実践において単一のカテゴリーではないということが明らかになった。カナダの状況では「多様性と多文化主義」は、ブランドとして、社会政策として、経済政策として、また政治戦略として機能している。このテーマについての議論を非常に難しくしているのは、このような「多様性の多様性」である。つまり多様性とは、不安定であり、相対立する利害を主張し、緊張と摩擦を生み出す。大阪大学から来てくれた学生たちは、コースのシラバスが「多様性」の問題に根差した闘い（近隣地区、市、国家の中を問わず）を中心として作成されていることに驚いたかもしれない。調和した暮らしやコミュニティの基礎であるはずの多様性は、国としてのカナダのイメージにとって重要な部分であるが、一般的な理解とは合っていない。このイメージは、人種主義やカナダによる植民国家の抑圧（先住民、中国人、韓国人、日本人の移民等の）に対抗する多くの闘いの上に形成されている。カナダの多様性プロジェクトは、対立から生まれ、対立を作り出してきた。これらの対立は、時に暴力的であり破壊的であるが、同時に変化を生み出すということも、これまでに見てきた。対立によって、集団はそれ以前には見過ごされていたパブリック・アイデンティティを形成し、自らのコミュニティへの関わり方に影響を与え、生計を立てながら居場所を生み出すことができるようになる。したがって、多様性のある種の概念に「対して」闘うこと、あるいはこれを「通して」、これと「共

に」闘うことは、必ずしも完全な失敗を意味するわけではない。

トロントの中でも最もダイナミックで争いが激しいコミュニティのいくつかを、大阪大学未来共生プログラムの学生と共に経験することにより、カナダの多文化主義というブランドについて新たな批評が生まれた。これらの地域に初めて足を踏み入れた研究者たちによるコメントや質問は、RAチームにとっては立ち止まって改めて考える機会を与えた。議論によって、「多文化主義」と「多様性」についての私たちの理解は広がり、より広範な存在（人間と共に人間以外をも）を当事者として含めることになった。また、カナダと日本における異なるケースの比較をし、共通する困難を植民地支配的な構造の症状として位置づけることができた。RAチームは、大阪大学の学生たちのこれらの問題に対するあたたかな態度と洞察に心から感謝したい。そして、カナダで経験したことを今後の彼らの研究の前進に生かしてくれるようお願いしている。

注

- 1 2014年10月22日、マイケル・ゼハフビボー（Michael Zehaf-Bibeau）は、戦没者記念碑を警備中だったネイサン・シリッロ（Nathan Cirillo）伍長を射殺した。ゼハフビボーは住所不定で、薬物乱用の前歴があった。また、中東に渡航する計画を立てていた。彼は地元のモスクで友人に、聖戦を行うとの考えを伝えていたが、カナダ諜報部にテロ実行の可能性がある者としてマークされてはいなかった。カナダ連邦議会議事堂に侵入しようとしたゼハフビボーを、守衛官ケビン・ピッカース（Kevin Vickers）が発砲し射殺した。
- 2 原文：「whispers of indigenous presence.」（編者コメント）。
- 3 ここで言う「契約」は、白人定住者（または政府）と先住民の各部族との間に結ばれた、土地の所有権を軸とした条約を意味する（編者コメント）。
- 4 ここで記されている「人種」の概念は、トロントで行われた英語の会話に基づいている。北米の文脈では「人種」の存在を前提として議論されているものの、沖縄の文脈では一般的に、「民族」が使われている（編者コメント）。